平成25年度

「まほろばの里たかはた」文化遺産発信事業

地域の宝再発見事業成果報告書

（地域文化遺産悉皆調査）

「まほろばの里たかはた」文化遺産発信事業実行委員会

目次

序
目次
例言
図版
第一章　地域の宝再発見事業の経緯と課題　……1
第二章　調査報告・目録
一、竹森村入組文書　……3
二、二宮家文書　……45
三、旧屋代地区公民館所蔵資料　……48
四、『一二八』を採る～「高畠石」の石材切り出し作業の記録～　……53
第三章　まとめ　……61

例　言

一　本書は、平成二十五年後文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）を受けて実施した「まほろばの里たかはた」文化遺産発信事業「地域の宝」再発見事業（地域文化遺産悉皆調査）の調査報告書である。

二　調査は、「まほろばの里たかはた」文化遺産発信事業実行委員会（実行委員長　平　憲一）を主体者として実施し、高畠町教育委員会社会教育課が担当した。

三　本書の作成は、井田秀和、安部　温、小林貴宏が行い、各章ごとの分担は次のとおりである。

・第一章　（井田・小林）
・第二章一・二（安部）、三（小林）、四（井田）
・第三章　（井田・小林）

四　本調査の参加者は次のとおりである。

・竹森村入組文書写真記録
　齋藤　晃子、竹田　亜紀、笹原　理美、瀧口　友香、
　高橋佳帆里
・二宮家文書写真記録
　二宮　美夫、二宮　稔子
・屋代地区公民館資料調査
　半田　清、大槻　紀雄、二宮　美夫、二宮　稔子、
　竹田　彰、濱田　幸助、山川　明子、根津　恭子

五　調査及び本書の作成にあたり、次の方々よりご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。（敬称略）
竹森入組、引地兼二、工藤助七郎、佐藤大介、宮田直樹、ＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワーク、東北芸術工科大学文化財保存修復センター、佐々木育子、高畠町文化財保護会、屋代地区公民館

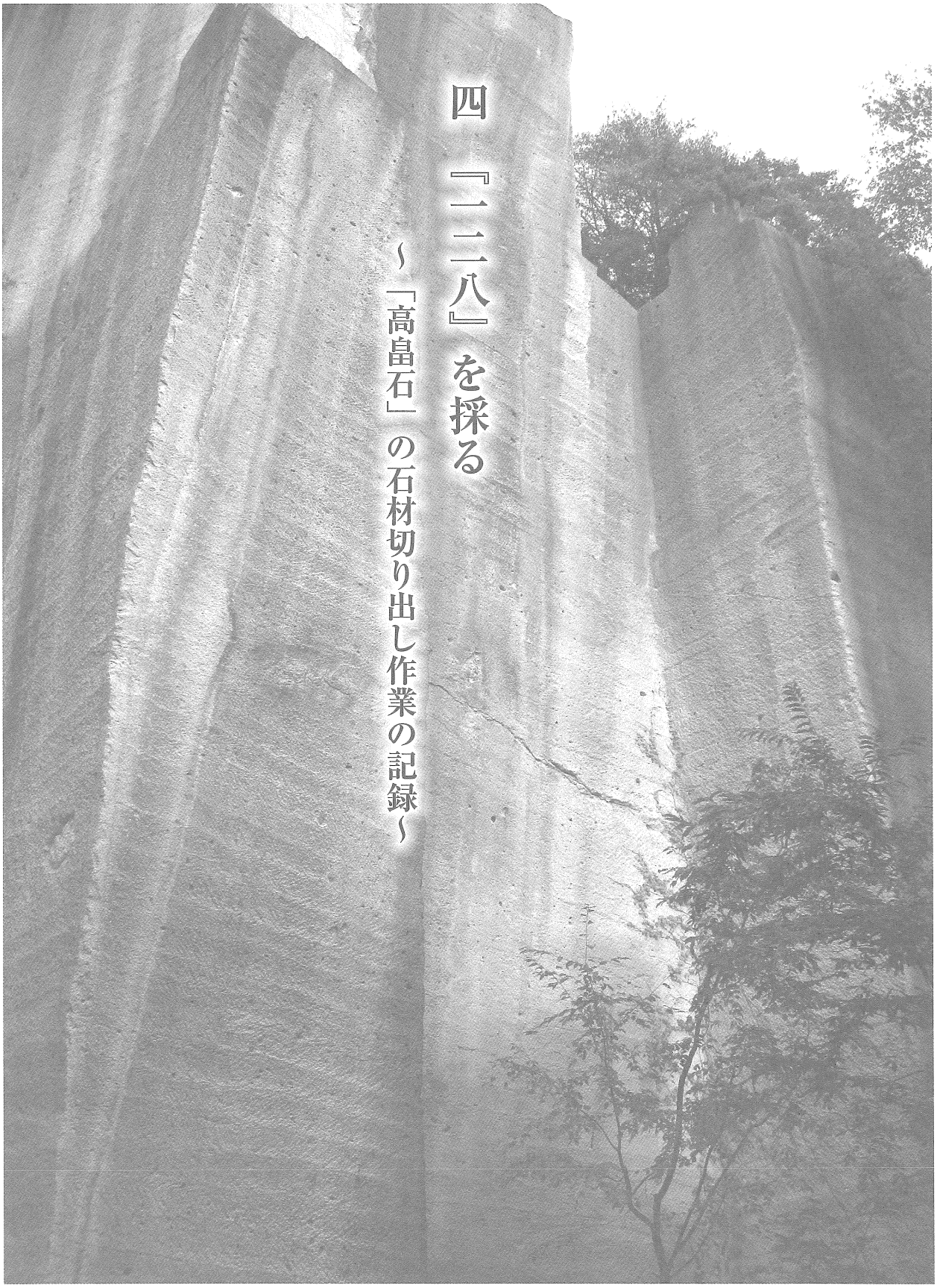
六　竹森村入組文書及び二宮家文書は、以下により目録を作成した。

1. 通し番号を付した。
2. 資料名は文書の表題に拠り、付記を（　）内に記した。
3. 表記は当用漢字とし、判読不明な文字は「□」とした。
4. 「齋」・「斉」は「斎」。「ヱ」・「工」は「衛」、「當」は「当」、「扣」は「控」にそれぞれ統一した。
5. 年代は年月まで記し、不明の場合は「年月不明」とした。
6. 形態は、図・綴の別を記し、綴の場合は竪・横帳の別を記した。

七　旧屋代地区公民館資料は、以下により目録を作成した。

1. 資料名は、大、小に分類し、小分類の「　」内に標題名、（　）内に資料の種類を記した。また、宛名がある場合は、資料名に続いて標記した。
2. 数量は、資料小分類の数量を記した。
3. 年代は資料に標記されたものを用い、フィルム、テープ等の記録媒体には記録年月日を記した。年代不明の場合は「不明」と標記した。
4. 寸法は㎜単位とし、円形のものは直径、縦横の形状が明確なものはタテ・ヨコの寸法を取った。
5. 材質は、資料を主に構成する材質を記した。
6. 外容器が付属する場合はその旨を表示し、「　」内に標題を記した。
7. 備考には、その他必要な事項を記した。

八　本調査に関する記録類は、すべて高畠町教育委員会社会教育課が保管している。



四 『二二八』を採る

～「高畠石」の石材切り出し作業の記録～

「瓜割石切り丁場」

横縞のように見える線一本一本に、石切りの歴史が刻まれている。線の数は100本を遥かに超え、往時を偲ばせるとともに、上から順に掘ってくる「階段掘り」の様子がよくわかる。

はじめに

高畠町は、ある意味で『石』の町である。『石』は、町の東半分を占める山間地のいたるところに見られ、町の基盤を形成している。この『石』は凝灰岩であり、古より高畠の歴史と深くかかわってきた。凝灰岩の露頭地帯に所在する縄文時代草創期の洞窟・岩陰遺跡群や古墳の石室の部材、板碑等の石造物等々、町内に残る数多くの文化遺産がそれを物語る。そのいずれもが高畠町の歴史を語る上で不可欠の存在である。現在も、多くの家々で、町内から産する凝灰岩を見ることができ、生活の中で生きているものも少なくない。町内より産出する凝灰岩を総称して『高畠石』と呼び、切り出された石材は、それぞれの石切り丁場ごとに呼ばれるのが常である。

石切り丁場は、大小取り混ぜて町内の各地に見られるが、比較的規模の大きい丁場は十二ヵ所である。高畠石採石発祥とされる大笹生石や質の高さで知られる沢福等石、旧高畠駅舎の石材が採られた瓜割石などである。「一二八」と呼ばれる定尺の角石は、近世後期頃から採石が行われたと考えられているが、その技法は平成の時代に入っても、あまり姿を変えず受け継がれてきた。平成二十二年に生業としての手掘りによる石切りが途絶えたことをうけ、瓜割の石切り場での「一二八」の切り出し作業を記録するため本事業を実施したものである。

1．瓜割の石切り丁場の概要

瓜割の石切り場として知られる丁場は、国道一一三号とぶどうまつたけラインが交差する地点の北東部に位置する。西側には慶応元年（一八六五）に組織的な石材採掘を開始した沢福等丁場があり、ここで石工をしていた星善作氏によって大正十二年（一九二三）に採掘が開始されたのが瓜割の丁場である。終戦直後頃には40人ほどの石工がいたというが、昭和五十年代には六人に減少、平成二十二年に最後の石工・後藤初雄氏が引退し、その幕を閉じることとなった。瓜割石を使用した建造物の代表的なものとしては、旧高畠駅舎（昭和九年建設当時は高畠鉄道）や掬粋巧芸館・日本館（川西町）などがある。

2．「ホッキリ」による石材の切り出し作業

『高畠石』の代表的な採掘方法として、石工の手作業による「ワッカケドリ」と「ホッキリ」の二つがある。露頭する岩塊や転石を割って採る「ワッカケドリ」と、ツルを用いた溝掘り技法である「ホッキリ」の二つで、「ワッカケドリ」は間知石などの小型の角石を、「ホッキリ」は『一二八』と呼ばれる定尺の角石を採るために用いられた。一尺二寸×八寸×六尺の寸法を持つことから『一二八』と呼ばれた定尺の角石は、最も一般的な『高畠石』の生産品である。「ホッキリ」は石工の手作業による採石法であるが、昭和四十年代から五十年代にかけての一時期、瓜割や西沢などの一部の石切り場で機械掘りが導入されたことがある。しかし、効率が悪く採算も取れないことから定着することはなく、手作業による石切りが平成二十二年まで行われた。

今回、瓜割の石切り丁場で石切りを行っていた引地兼二氏のご協力により、実際に「ホッキリ」の実演をしていただいた。引地氏自身、ホッキリツルをふるうのは三十年ぶりということであったが、さすが『昔取った杵柄』のことわざどおり、鮮やかなツル捌きであった。

これは、平成二十五年十一月十四日から十一月二十八日にかけて行った、引地兼二氏による「石切り」の一連の作業とその後の聞き取りの記録である。

①小口を掘る

角石の幅一尺二寸より若干長めに溝を掘り、小口の面をつくる。石切りの最初の作業である。作業の流れ等は以下に詳述する「ホッキリ」と同じ。溝の幅は二寸二分。

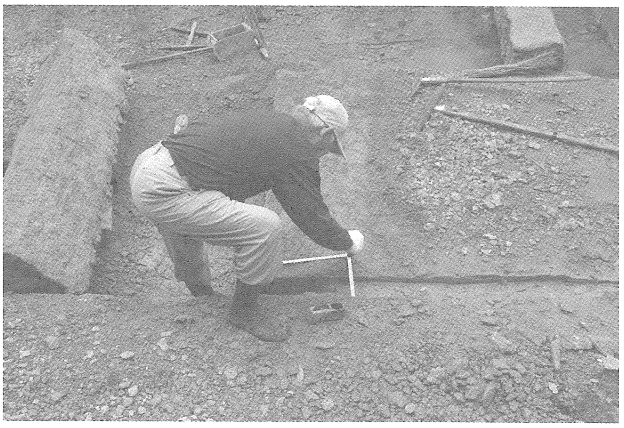
②ホッキリ溝の墨付け

上面をホウキで清掃し、溝掘り箇所に墨付けを行う。溝の幅は小口部分と同じく二寸二分。この時用いるのは、墨壺、墨刺、指矩などである。墨壺のツケズミや壺糸は、今は市販のものがたくさんあるが、昔は硯墨を砕いて入れ、真綿をかぶせて使っていたという。使用される糸は絹糸であり、山での切り出しには太めの糸、仕上げのときは細い糸を使用した。

墨付け作業１

上面の清掃

墨付け作業２



上面の清掃

③溝ツキ

墨付けされた線に沿って溝の道をつくる。ホッキリヅルである程度の幅で掘り下げ、ハヅルで両端に面をつくりながら仕上げてゆく。

ホッキリヅルは、断面四角錐状を呈し両端が尖るもので、柄は中央部に着けられ、溝掘りの中心的な役割を担う道具である。ハヅルは、ツルの両端が両刃の平となるもので、線に沿って面をつくる時に使用される。石切りで使用されるツル類の柄の材料は、イタヤカエデが用いられる。

ホッキリヅルによる溝ツキ

溝ツキ完了（奥にホッキリヅルとハヅル：右が見える）

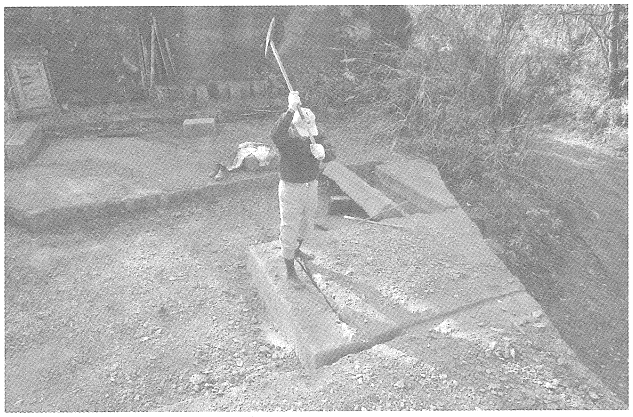
④ホッキリ

溝ツキが終わると、溝掘りに入る。溝掘りは、基本的にホッキリヅルのみでの作業となり、一二八の場合八寸の厚さを確保するため、八寸の深さまで一気に掘り下げながら前に進む。

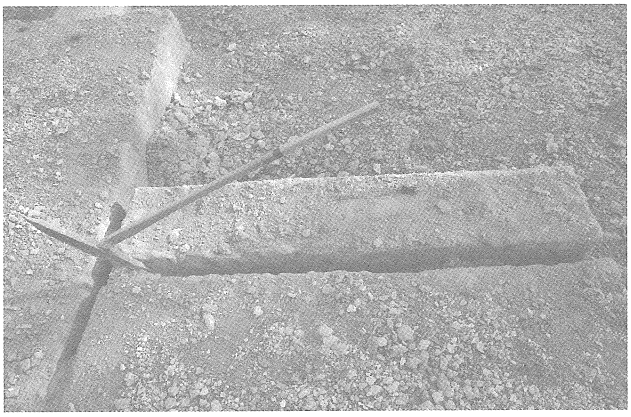
ホッキリヅルを振り下ろす回数は何千回にも及び、石切りの工程中、最も重労働となる作業である。一見単調な作業に見えるが、溝の両端を交互に掘って側面をつくり、溝下底部の両端の角を立てながら掘り

進めなければならない。溝の中央部だけ掘ってしまうと溝の幅が徐々に狭まり、下まで掘れなくなるからである。

厚さが八寸を大幅に超える例外的な寸法となる場合は、二度掘りをしなければならなくなるため、予め溝の幅を広くとっておく。この時、幅の寸法に決まりはないが、溝に片足を入れて作業できるように溝の幅を設定する。



ホッキリヅルによる溝掘り



修了間近のホッキリ溝とホッキリヅル

⑤矢穴を掘る

矢を入れる面を平らにすることを「サコル」という。石材の厚さ（高さ）を確保しつつ面の調整が終わったら、ホッキリヅルやケズリヅルを用いて矢を入れる箇所を掘る。

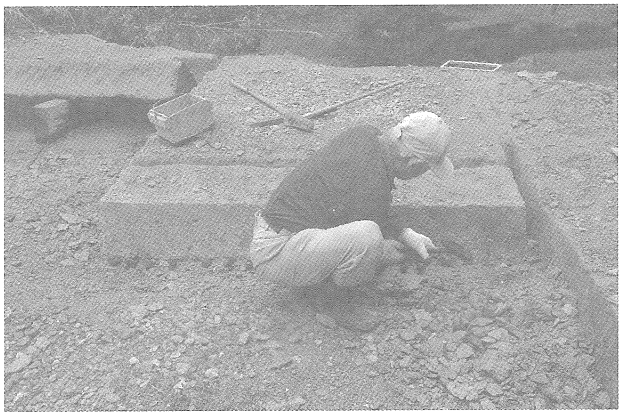
⑥矢を入れ、叩く

掘られた矢穴は、ツツキという道具で穴を整え、順次矢を入れてゆく。矢の数は長さ六尺に二十本前後の矢を使用する。

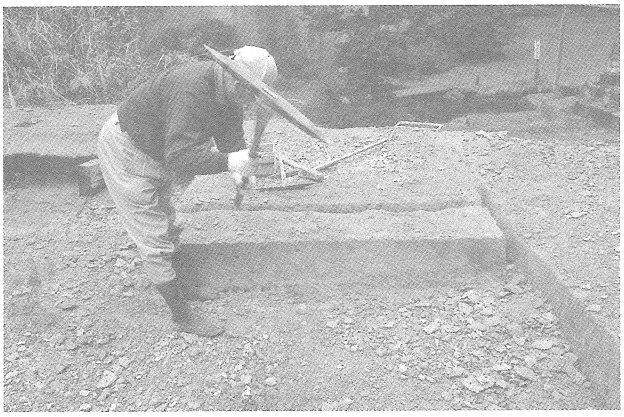
ホッキリヅルによる「サコル」作業

矢を全て入れ終わると、石の上からゲンノウで矢を叩く。端から順番に叩き始め、均等に力を加えながら繰り返す。叩く力がバラつかないよう注意し、リズミカルに作業は行われる。使用されるゲンノウは、四角錐の先端を除去したような形状をしており、打面の小さい方をカガミ、大きい方をアタマと呼ぶ。柄は重心を考慮してアタマ側に偏して着けられる。矢はカガミの方で叩く。

石が割れた時は、打音の違いで判断できる。叩き始めから割れる前までは、石切り丁場にゲンノウの金属的な音が響き渡るが、割れたときには鈍い音へと変わる。



ツツキを用いて矢穴を整え、矢を入れる



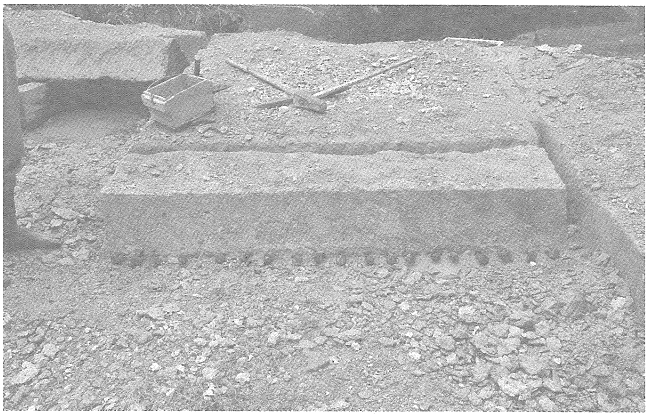
矢穴を掘る

⑦石を起こす

石が割れたら、山仕上げに入る。このままでは仕上げができないので、石を動かす必要がある。石起こしは、カナテコやカギ、枕（木や石）等を使用して行う。最初に、ホッキリ溝側の下底部にカギと呼ばれるL字型をした金具を引っかけ、カナテコを使用して石を起こす。石の状態によっては、この前に、矢穴側の割れ面にカナテコを差し入れ少し持ち上げ、枕を入れておく時もある。起こされた石は完全に裏返しとなるわけではなく、作業がしやすいように面が斜めになるように起こされる。

割られた石は、上の面を「ウラ」、下の割れた面を「ツラ」と呼び、「ツラ」が石材の表になる。側面の呼称は特にないとのことである。「ツラ」は、長辺部より中央部が若干厚みを増し、これに対し「ウラ」は「ツラ」とネガとポジの関係となるので、当然中央部より長辺部が厚くなる形状をなす。ウラの幅は一尺二寸であるが、ツラの幅は一尺二寸五分が山仕上がりの寸法だという。

ゲンノウで矢を叩く

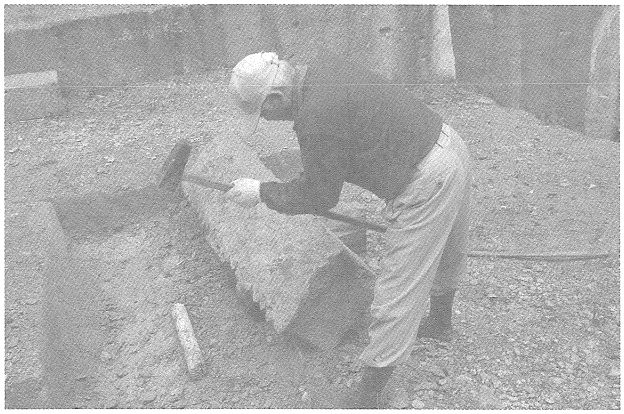


石が割れた状態（矢の数は19本　奥にゲンノウが見える）

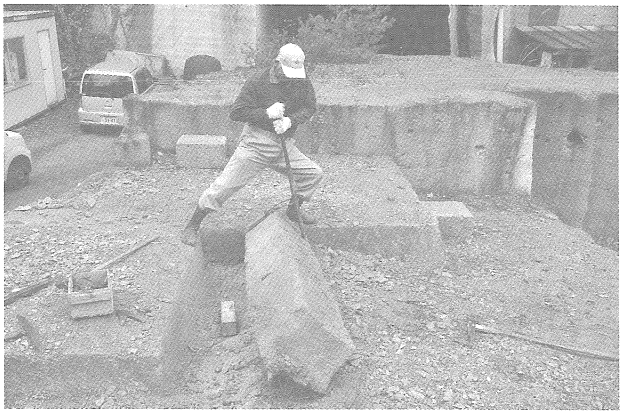
⑧コヅラの調整と墨付け

石起こしの最初の状態は、ツラが上を向いた状態となるが、石が割れた時に小口部に羽根状の出っ張りなどが残る場合がある。このような出っ張りと、溝掘り時にできる下半部が若干厚くなった部分を取り外し、面を整える。この時使用されるのは、ゲンノウやホッキリヅルである。ゲンノウは比較的厚く残った部分を取り外す際に用いられ、アタマを使って余分な部分をはぎ取る。面の調整が終わると、ツラ側に沿って墨付けが行われる。この時の墨付けは重要であり、石材が反らないよう板材などを用いて確認しながら行われる。

カナテコで石をずらす



ゲンノウによるコヅラの調整



カナテコ、カギを用いての石起こし

⑨「ツラ」面の縁入れとツル削り一

サシバと呼ばれる道具を使って、墨の線に沿って縁の部分の調整を行う。サシバは、刃の部分を交換できる所謂チョウナのことである。サシバを使用するときは、聞き手が左右どちらであっても、右手が手前になるように使用するという。

縁入れが終わるとツルケズリを行う。ツルケズリは、傾けて設置されたツラの上半分の面を調整するもので、道具としてはケズリヅルが用いられる。厚く残るような箇所については、ゲンノウが使用される場合もある。

⑩「ウラ」面の縁入れとツル削り二

カギとカナテコを使って、また石を回転させ、ウラ面を上に向ける。ここでも石は作業しやすいように斜めにし、寸法を確かめ墨付けを行った後、⑨と同じように縁入れを行う。ウラ面は中央部に比べ縁の部分が厚くなっており、ゲンノウやホッキリヅル、ケズリツルを使ってある程度調整してから、サシバによる縁入れとなることも少なくない。ここでも斜めに置かれた石の上半分の仕上げとなる。

⑪「ツラ」面及び側面（矢を入れた面）の縁入れとツル削り二

さらに石を回転させ、ツラ面を上に向けるが、⑨とは逆の辺（矢を入れた面）を上にする。矢を入れた箇所には鋸歯状にはみ出しが残っており、墨付けをしながら余分な部分を取り外し、側面を整える。その後、ツラ面で未調整の半分について縁入れ、ツル削りを行う。側面の仕上げも同時に実施する。

⑫「ウラ」面の縁入れとツル削り二

石を回転させ、ウラの残り半分について⑩と同じ作業を行う。この作業で山仕上げは終了する。

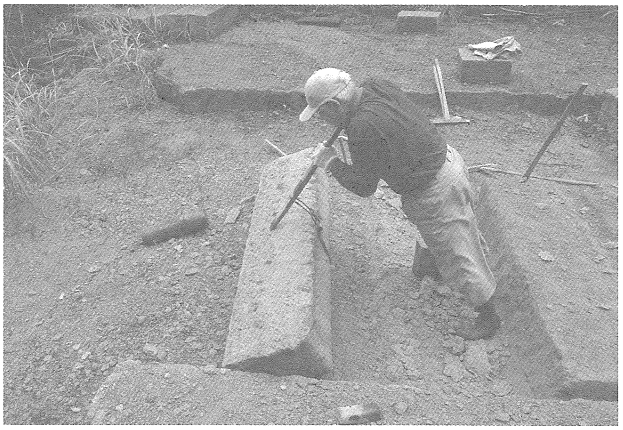
石起こし後の「ツラ」面

「ツラ」面のツル削り

サシバによる縁入れ

「ウラ」の縁入れ（厚い部分をゲンノウではずす）

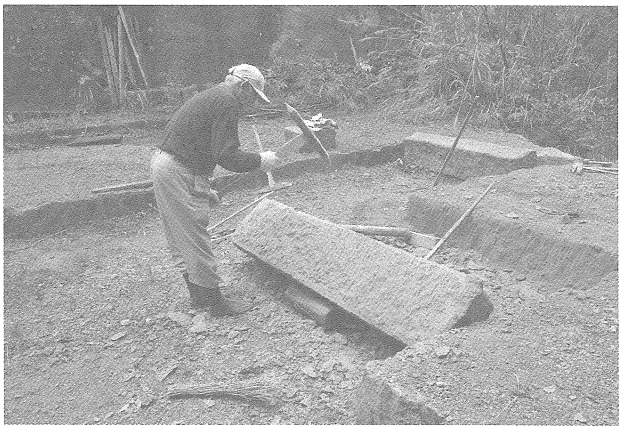
墨付け作業（同時に反りを見ている）



⑩の作業が終わり石を回転させている

「ウラ」最後の縁入れ作業

鋸歯状にはみ出した部分の除去



「ツラ」最後のツル削り

「ホッキリ」に使用される道具類

※矢を入れる木箱の周辺にはホッキリヅルをはじめ、ツツキ、ゲンノウ、カナ　テコが見える。下には石起こしで重要な役割を担うカギがある。上に見える丸太は枕木として活躍する。

以上、切り出し作業の流れであるが、一日の作業の流れは次のようになるのが一般的だという。

a　石切り場に到着後、④のホッキリから朝の仕事が始まり、お昼前までに⑥の石を割るまでの作業を行う。ホッキリは相当な重労働であるため、できるだけ元気なうちにやるということである。

b　ほぼ午前中を費やしてホッキリが終わると昼食になり、この間に鍛冶仕事など道具の手入れなどが行われる。

c　午後は、山仕上げの時間で、⑦の石起こしから⑫の縁入れ・ツル削りまで作業し一二八を仕上げる。

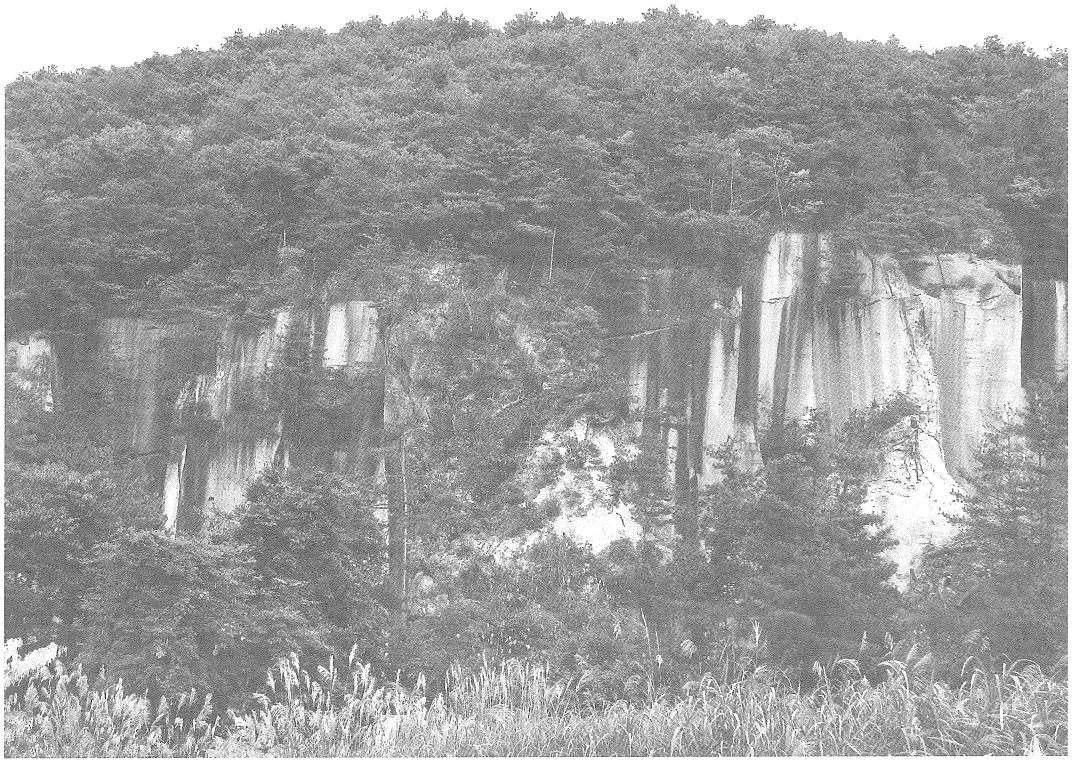
d　一本仕上げが終わったら、翌日の段取りとして①の小口をつくり、③の溝ツキまで終わらせて帰る。

結び

かつて石切りを生業とし、盛んに一二八を切り出していた方々の中で、数はめっきりと減少したとはいえ、今も石切りができる方がいらっしゃることは、本当に幸いなことである。ホッキリから山仕上げまでの一連の作業を記録できたことは、ひとえに引地兼二氏のご協力の賜物であり、心より感謝申し上げる。三十年ぶりにホッキリヅルを手にしたとは思えない仕事ぶりには、ただただ感嘆するのみであった。今回は、一二八の切り出しという一点に焦点を絞って記録したが、今後は石切り場に置かれたままの状態にある一二八を山から下ろす作業も実施し記録していきたいと考えている。今回の石切り作業の記録は、国内で最後に行われた手掘りによる石切りの記録であり、切り出された石材はまさに最後の一本である。山での作業の後、引地氏よりいろいろとお話をうかがったが、最後にお聞きした話を記し結びとしたい。

高畠町に残る各石切り場は、露天掘りを基本としており、山の上の方から階段状に掘り下げられる所謂「階段掘り」である。良好な石材のある山で、最初に行われるのが「カタツケ」である。もちろん、石の切り出しを行う場所の土を取り除き岩盤の上部に平坦な面をつくることから始まるが、角石を採る際に必ず生じる斜面側の断面三角形状となる余分な部分を採る作業が「カタツケ」である。一二八を採るのに十分な長さを確保してカタツケをしなければならず、前処理となる土の除去作業も含め結構な仕事であった。そして、この土を取り除き捨てる作業を「マエサゲ」と呼んだ。石切り丁場での開始期は、面的にも狭いため、石が採れなくなるとマエサゲとカタツケを繰り返し行わなければならなかった。また、石材の切り出しが進めば徐々に下の方へ進むわけであるから、面的には広くなり採れる石材の量も増加するためマエサゲやカタツケの頻度は少なくなった。しかしながら、下へ下がるほど土の堆積は厚くなるため土捨て場に困ることもあったという。マエサゲは、石採りが終わる頃、雪が積もり始める前に、次の年に石採りをする場所について行われた。

◆参考文献
1 「たかはた・石の文化をさぐる」高畠町郷土資料館（二〇〇二）
2 北野博司・長田城治『高畠石の外構利用とその集落景観』「平成二十四年度文化財保存修復研究センター成果報告書」（二〇一三）



瓜割石切り丁場の近景